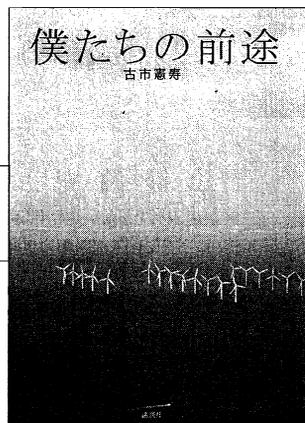


この本では、猛烈とは一線を画す起業家たちが登場する。古市氏自身も社員3人のITベンチャー企業の一員だが、儲かっても上場しない、社員も増やさない、同じマンションに住み、会社はファミリーのような存在だという。切磋琢磨よりは共存と「つながり感覚」を大切に、無傷で働こうとする今の若者を彷彿とさせる。

古市氏は、起業を勧めようとしなない。最終章近くでは、「自由格差社会」という言葉を提起する。ビザなしでも多くの国に自由に行ける、でも、帰ってこれなくなっても「それも自由だ」と揶揄する。評者の周りにも「面倒だから海外旅行はしたくない」という若者が増えているのも頷ける。今や、自由は、手放して喜べることではない。起業の規制緩和に対しても同様のな



## 僕たちの前途

古市憲寿 著  
1890円 講談社  
03-3945-1111

社会学では、同様に個人の自由な選択に責任が帰せられる個人化のマイナスイメージを強調する。しかし、若手社会学者である古市氏は、「どうせお金を稼ぐなら好きな人と好きなことをやってほしい」「社会を変えたいなんてだいそれた気持ちはない」と言う。

社会に猛烈に立ち向かわないことによって、彼は「個人化の罠」からくぐり抜けてきたといえる。

さて、教育においては、「自由格差社会」の中、どのように若者の労働観を育てるのか。「猛烈に自己決定で生きよ」というのか、それとも「自分らしさを大切にするためには、くぐり抜けよ」というのか。評者は、理想追求の教育においては、そのどちらでもなく、青少年の個人化のプラスの側面を伸ばしつつ、私生活を大切にしながら、職場や地域では、他者と切磋琢磨し、支え合う人材を育成することが可能と考える。

(聖徳大学教授・西村美東士)